

主日礼拝順序
(降誕前第8主日・聖徒の日)

11月1日 午前10:15~11:30

	司会	津田伝道師	
前奏		片桐聖子姉	
招詞		司会者	
頌栄	539 (起立)	—	同
主の祈		—	同
交読文	6 (詩23)	—	同
讚美歌	136 (起立)	—	同
聖書	ヨハネ黙示録21:1~4 (共新 477頁/初新 554頁)		
牧会祈祷		津田伝道師	
合唱	21-379(1,5,8)	聖歌隊	
説教	「主にありて生く」	岩井牧師	
讚美歌	361 (起立)	—	同
永眠者記念式			
記念者芳名朗読		市野瀬翠執事	
祈祷		岩井牧師	
讚美歌	477(1,3,5)	—	同
11月誕生者の祝福			
献金		—	同
頌栄	542 (起立)	—	同
祝祷		岩井牧師	
応唱		聖歌隊	
報告		市野瀬翠執事	
後奏		片桐聖子姉	

「聖徒の日」によせて

「生命(いのち)の希望」というテーマで、去る9月、同志社神学協議会が行われ、大林浩氏(神学部客員教授)が講演されました。印象に残っているのは、キリスト教の人間観を「死後生」を視野に入れていたところでした。

「人間の本质は靈魂というようなモノではないし、個別存在でもない。人間の人格とは、関係によって構成される豊かな内容をもつ。人の一生の間に出会う多くの人々との関わりの集積総体が人格というものである。従って、人格をあたかも一つのモノであるかのように考えて、一人の孤立した存在としてのキリスト者というものを考えるのは誤りである。キリスト者とは教会という生命体の中で、交わりを基盤として成立するものであり、イエスの「生と死」に与る世々の人々との交わりを一つにする者である」

さらに「生者が死者を弔い、未永く死者を記念しねぎらうということは広く人間社会にみられることであるが、死者が生者を支えるということはあまり認識されていない。「生と死」、「生者と死者」との有機的關係、相互媒介の關係を考えると、死者の果たす積極的役割が認識されねばならない。キリスト教の「聖徒の交わり」という考え方は、それを正しく認識させるものである。……現世の人間

關係では、それが親密であればある程にその關係の外側に親密でない人が置き去りにされるという限界がある。……生者と死者との交わりは、そこに死者を介することによって浄化される。教会という人間のつどいは、「聖徒の交わり」として、究極的な人間關係に支えられて、現世の人間關係をより高いものになしようと努力する集まりである。……このことはすでに天に召されたキリスト者先輩たちに大きく負うところがある。深い敬意を表さなければならない(講演記録より)と言っています。

死は終りではなくて、新しい人格關係のはじまりであるという考え方は、人格を人と人との関わりの集積の全体として考えるところから出て来ます。

私たちが、不安を感じ、怖れを抱く時というものは、關係が薄れ、弱くなっていく時です。逆に、關係(表面的なことを言っているのではなく、死者が生者を支えるというような、地上の時間を超えた關係)が厚くなる時、孤立感がゆるめられ、温かい思いに包まれます。黙示録21章がいう「新しい天と地」とは、そのような關係に入れられることではないでしょうか。聖徒の日、永眠者記念礼拝の深い意味を大事にしたいと存じます。

(岩井記)